

〈解答〉

- 1 イ
2 ア
3 〔例〕 豊かな陽光のもとで舞いあがり舞いおりしている鶴の姿。(26字)
4 (1) 〔例〕 鶴に対する認識(7字)
(2) はっきりと言える
(3) 優雅

配点 ① 4 (2)、(3)は各1点、他は各2点 10点満点

〈解説〉

- ①
1 詩の5行目は3行目の前に、10行目は6〜7行目の前にあるのが通常の語順である。語順を入れかえることによって、感動を強調する表現技法を「倒置法」という。
2 「檻のなか」で「餌」を与えられている「鶴」とあるため、この鶴は人間に飼育されていることがわかる。そのような状況であっても、自然界に暮らしている時と変わらないような「優雅な姿」を見せる鶴に対して、この詩の作者は「失望」しているのである。つまり、鶴には、自然界で暮らしている時だけ「優雅な姿」を見せてもらいたいと思っていたのに、そうではないと知り、裏切られたような気持ちになったため、作者は「失望」したのである。
3 まず、傍線②がある詩の9行目と、その前後にある8行目と10行目が、倒置の関係になっていることを確認する。つまり、本来は、8行目↓10行目↓9行目(豊かな陽光のもとに／舞いあがり舞いおりしている鶴のことを／あたかもそれが吉祥のしるしなのだと思じられて)となるはずが、倒置により、順番が入れ替わっているのである。よって、傍線②の「それ」という指示語が指す内容は、本来は直前にあるはずの「豊かな陽光のもとに／舞いあがり舞いおりしている鶴」ということになる。このことをふまえた上で、条件に合わせてまとめる。

- 4 (1) 作者は、ある固定観念をもって、鶴とはこうあるべきだという考えをもっていたのだが、それらが誤りで、本当の鶴がどのようなものであるかを、作者なりに発見したというのが、この詩のテーマとなっている。つまり、Aには、「鶴に対する固

定観念」といった言葉が入るのである。

- (2) 詩の2行目に、「今になって思えばはつきりと言える」とあるが、この部分の「今」は、鶴に対する過去の固定観念が誤りで、本当の鶴を発見した「今」を指している。まちがいないこととして、「はつきりと言える」とあるので、「確信した」ことがわかる。

- (3) 詩の第2連では、檻のなかにおいても優雅な姿を見せる鶴の様子、第3連では、自然の中で優雅に舞う鶴の様子がそれぞれ描写される一方で、第4連では、「永劫に荒れる吹雪のなか」を「羽もたわなに折れそうになりながら」飛ぶ鶴の様子、つまり、優雅さの裏側にある、鶴の苦しみが表現されている。すなわち、苦しさに耐えながら懸命に生きているからこそ、鶴は、どのような状況でも「優雅」さを失わないのだと、作者は気づいたということである。